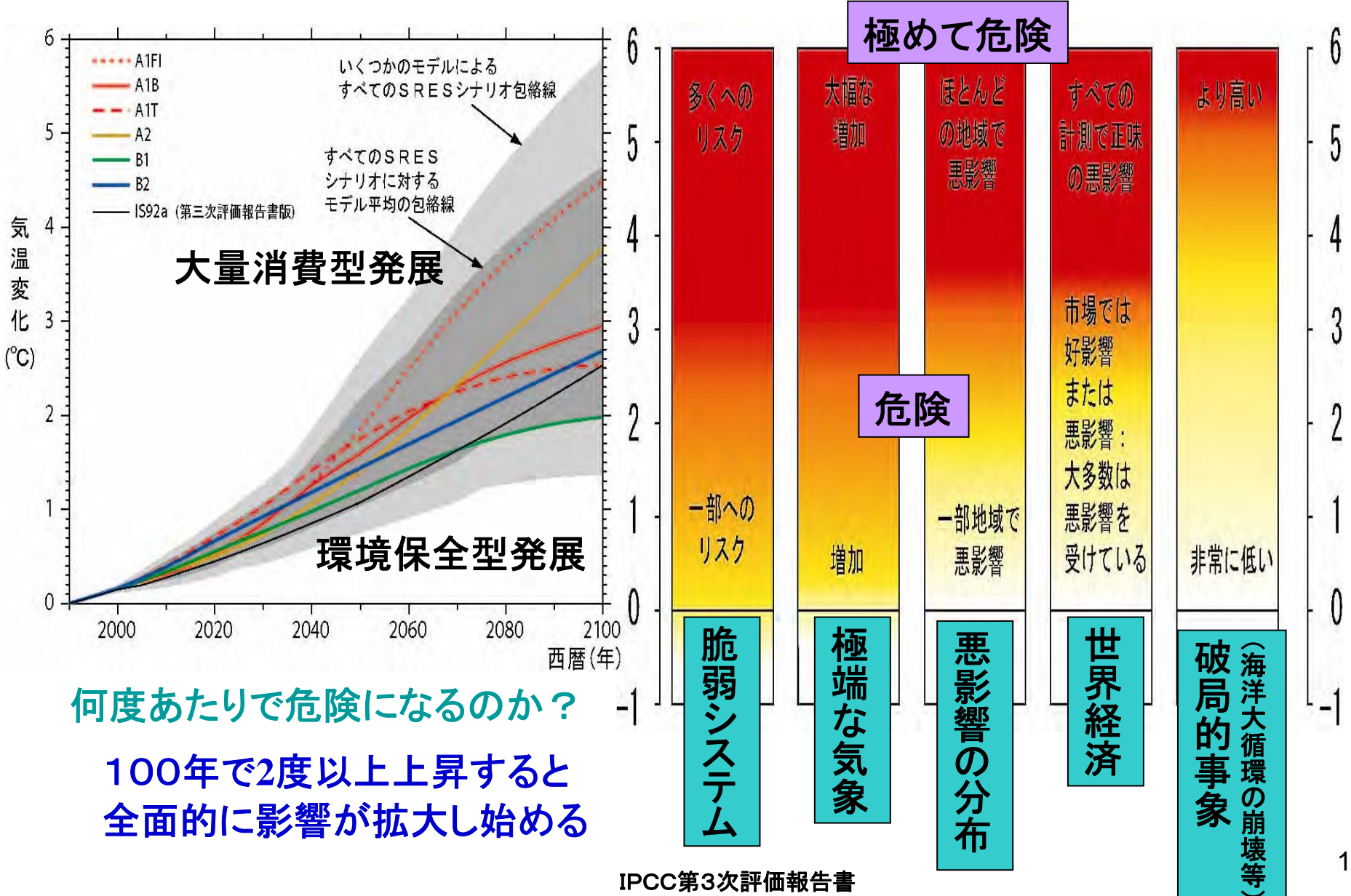


前提条件の整理②

どの影響分野を「危険判断」の対象として取り扱うか



前提条件の整理③ 時間スケール

○ 気温上昇、影響を評価する時間の起点

- ✓ 産業革命頃(1750年頃): EUなど
- ✓ 工業化頃(1850年頃): ドイツなど
- ✓ 1990年(条約、京都議定書基準年): IPCCのSRES排出シナリオなど

○ 目標年

- ✓ 2100年
- ✓ 温室効果ガス濃度安定化時点
- ✓ 気温安定化時点

※EU首脳会議結論文書における「産業革命前と比べて2°Cを超えない」に係る記述では、目標年は明記されていない。

前提条件の整理④ 空間スケール／集計ルール

○空間スケール

- 全地球レベル（地球の年平均気温）
- 地域レベル（1976～2000年、北半球の中高緯度で最も気温が上昇）
- 国内レベル（先進国、熱帯地域や小島嶼の途上国）

○集計ルール（被影響者（Exposure Unit）と影響指標）

- 生態系、人間（直接影響）、社会経済、地球システム
- 市場影響、人命損失、生物多様性、収入、生活の質
- Millions at Risk（世界規模の影響）

前提条件の整理⑤ その他の視点

○ 不確実性をどう勘案するか

- ✓ 排出シナリオ(将来の社会、経済の動向)
- ✓ 気候感度
- ✓ フィードバック
- ✓ その他の要因

○ 気候以外のリスク因子や、(気候変化が無いとしても存在する)ベースライン的なリスクをどう勘案するか

○ 影響閾値は適応によって変わる

- ✓ 先進国で適応能力高く、途上国で低い
- ✓ 影響を低減する適応策の検討が重要
(ただし、影響閾値と適応の関係の研究は十分でない)